

『望遠ノート』

作 千頭和直輝

原案

サイモン・シン 「ビックバン宇宙論」

宮沢賢治 「銀河鉄道の夜」

舞台

床に様々なレールが敷いてある。そのどれもが途中でかすれて消えている。様々な大きさの箱が置いてあり、それは椅子にも長椅子にもテーブルにも柱にも見える。それぞれの箱は移動することができ、場面によってその役割が変わる

【現代】

ソラミ（22）

1990）

大学5年目。就職浪人一年目。生きている人間。

なにをしたらいいかわからない。

まわりに情報が溢れすぎていて、もういいや、眠たくなってしまふ。

そんな夜に一人で空を見上げていると、気持ちが落ち着く。

ハルミ（46）

1962）

ソラミの母。生きている人間。

昔、天文学の勉強をしていた。大学院（博士）を卒業後1年目に、子育てのため退職。現在はソラミの幸せが最優先。天文学を志していたことは本人も忘れかけている。

【銀河鉄道】

ジョバンニ（15）

1924）1933

本当の幸いを探し求める。生きている人間（ソラミ、ハルミとは違う世界）

夢見がちで、星ばかり見ているため、孤独になりがちな少年。

カムパネルラ（18）

1924）1933

孤独。本当の幸いを心から信じることができない。その実、心から本当のさいわいを求めている。

星が好きで、星について詳しいジョバンニと一緒にいることが楽しい。

車掌

原作の第三次稿に登場するブルカニロ博士。銀河鉄道の誕生からずっと車掌をしている。

天文学の父としてのガリレオ・ガリレイ。

彼自身が操作することはなく、敷かれたレールの上を走らせるだけ。

【天文学者】

アルベルト

アルベルト・アインシュタイン

1879～1955 ドイツ

定常宇宙モデルを支持するが、後にビッグバンモデルを認める。

天文学界の重鎮として落ち着いているが、天文学の話題になると自制を失う。

ウイリアム、アラン、あるいは エドウィン

エドウィン・ハッブル

1889～1953 アメリカ

ウイルソン山の天文台にて宇宙の赤方遷移を発見。この発見はビッグバンモデルを裏付けるものになる。

フリードマン、あるいは ジョルジュ

ジョルジュ・ルメートル

1894～1966 ベルギー

ビッグバンモデルの創始者。神学者でもある。

落ち着いた性格だが、天文学に関してはつきりとした意見を示す。

ボンデイ、ゴールド、あるいは フレッド

フレッド・ホイル

1915～2001 イギリス

宇宙は安定しているという定常宇宙モデルの創始者。

自分の説は曲げず、それに反する考えを極端に嫌う。

アルファー、ハーマン、あるいは ジョージ

ジョージ・ガモフ

1904～1968 ロシア・アメリカ

ビッグバンモデルを支持するが、ルメートルのモデルにおける初期状態は間違っているとし、改良したモデルを作る。

宇宙背景放射を予測。

ペンジアス、あるいは ロバート

ロバート・ウイルソン

1963～ アメリカ

宇宙背景放射を初めて観測し、ビッグバンモデルの決定的証拠になる。

暗転中。暗闇の中で静かな音楽が聞こえてくる。それはゆっくりと降り注ぐ雨音のようである。舞台上に0の雨がぽつぽつと降る。ゆっくりと、うっすらと舞台に明かりが灯る。車掌扮するガリレオが中央に背を向け、ひざまずいている。以下、ぼそぼそとガリレオは宣言文を読み上げる。宣言文の読み上げを背景にして舞台は進行して行く。

ガリレオ わたくしガリレオ、齢七十を数えるフィレンツェ人ヴィンチェンツォ・ガリレイの息子は、自らこの裁きの場に召還され、キリスト教圏全体において異端とされる重大な罪に関して、最も名高く尊い枢機卿の宗教裁判長の前にひざまずき、聖なる福音書をこの目で見、この手で触れ、いつのときも、今も、それに神のお力によってこれからも教会が信じ、教えるものすべてを信じます。しかし、太陽が世界の不動の中心であり、地球は世界の中心ではなく動いているという誤った意見を捨て去り、口頭、書面など、いかなる手段でも前述の説を信奉、擁護、教授してはならないと異端審問室が裁判によりわたくしに命じたのにもかかわらず、また、前述の説が聖書の内容に反しているという通知を受けたにもかかわらず、わたくしはすでに糾弾されたこの新説を論じ、それを擁護する有力な主張を提示する本を何の釈明もせず、書き、出版したが故に、太陽が世界の中心であり、地球は中心ではなく動いていると信じているという異端の疑いを異端審問室に宣告されました。

したがって、すべての忠実なるキリスト者の心から当然のこととしてわたくしに向けられたこの強い疑いを取り除くことを願い、誠意と真正の信仰をもって前述の過ちと異端の説を捨て、おとしめ、憎むことを誓います。

役者たちが一人、二人と舞台に現れる。雨音に混じって彼らの言葉が聞こえてくる。その言葉は数を増し、音楽とともに空間を埋め尽くす。0の雨は加速し、やがて舞台に堆積しはじめる。

A 明日天気になーあれ。(靴を確認しに行く) あ、晴れだ!

A は小さい円を描いて回り始める。B、Cが入ってくる。

B なぜ、日はいつも上るのでしょうか。

- それは太陽神が毎朝東の宮殿で目覚めるからです。
- 、◇が入ってきて円を描き、座る。やや遅れて□も入ってくる。
- Ｂ なぜ、日はいつも沈むのでしょうか。
- 太陽神は黄金の馬車に乗って天空を横切り、西の地平に降り立つからです。
- Ｄ ではみなさんは、そういうふう川だと言われたり、（セリフを続ける）
- どうしました？
- Ｂ いえ。
- は円に加わる。
- Ｄ ミルクの流れた跡だと言われたりしていた、このぼんやりと白いものが本当は何かご承知ですか。
- Ｅ は黙っている。
- Ｂ 本当にそうなんですか。
- Ｂ は円に加わる。徐々に円は大きくなって行く。□、◇が入ってくる。
- Ｄ ジョバンニさん、あなたはわかっているのでしょうか。
- Ｅ はそれでも黙っている。
- あー、ですから、時間と空間はそもそも一つ概念なんですよ。そこを理解してもらわないとお話にならない。
- Ｄ ではカムパネルラさん。
- Ｅ も黙る。
- わかりました。で、その時空というものを想定したとき、何が起ころうて。
- 私たちが今まで信じてきた時間の概念は全く間違っていたことになりました。

D は見かねて話しだす。

D 大きな望遠鏡で銀河を調べると、銀河はたくさんの星の集まりとなって見えるのです。

H それは、どういう意味でしょうか。

D ですからもしもこの天の川が本当に川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川の底の砂や砂利の粒にあたる訳です。

D、Hも円に加わる。Iが出てくる。Aはソラミになり、椅子に座って本を開く。

G 時間は、全ての人にとって同じ速度で流れているのではなく、その人が空間を進んでいる速度によって相対的に変わるものなのです。つまり、絶対的な時間というものはや存在せず、観測者それぞれに固有の時間が存在すると、そういうことになります。

I 待って、ちょっと待ってください。

H の歩くスピードが遅くなって行く。以降、セリフを言った役者はスピードが徐々に遅くなり、やがて止まる。

E どうせ変わりっこないよね

I あなたの言っている事は、どうにも、その

G なんてでしょうか。

D このままでいいよ。このままで。

I 馬鹿げています。そうとしか考えられない。

G、Iはゆっくり円に加わり、やがて止まる。

Oの雨は加速し、舞台を埋め尽くす。

H めんどくさいよ。何も考えたくない。

C せっかく作ったこの場所を離したくない。

B ここまでくるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ。

H 現状維持ですよ、今はそれさえも難しいっていうのに。

G あーもうめんどくさい。

ガリレオが宣言文を読み終わると、音、声が消え、微かな雑音だけが残る。ガリレオは立ち上がりながら何かつぶやくが、小さすぎて聞こえない。

ソラミ え、なに。

ガリレオ それでも地球は回っている。

弾けるような音楽。ゆっくりと溶暗。

0と1の信号がはじけとび、目まぐるしく舞台を行き来する。
暗転。

車掌 銀河ステーション、銀河ステーション。

音楽は次第に消え、小さなノイズだけが残る。以降、ノイズは微かに聞こえ続ける。

ソラミ、ジョバンニ、カムパネルラが舞台に残る。ソラミとジョバンニはカムパネルラとは別車両にいる。

ソラミ ごめんね。私も今来たばかりだから。

ジョバンニ そっかあ。

ソラミ 君、名前は？

ジョバンニ ジョバンニ。君は？

ソラミ 「君」って、たぶん君よりはお姉ちゃんだとは思うんだけどな。

ジョバンニ うそー？

ソラミ 本当だよ。もう大学、（言いよどむ）5年生だし。

ジョバンニ ねえねえ、名前は？

ソラミ あ、ソラミ。

ジョバンニ へえー、珍しい名前だね。

ソラミ お父さんがね、宇宙を研究する学者さんなの。

ジョバンニ うわー、すごい！

ソラミ でもね、ほとんど家にはいないんだ。最後に会ったのは、もう大学入る前だったから、もう5年くらい会ってないかな。

ジョバンニ 僕の父さんもね、遠くの海で漁師をしてるんだ。だから僕も全然会ってないや。でも寂しくなんかないよ。僕には母さんもいるし、

カムパネルラだっている。ねえ、じゃあソラミのお母さんはどんな人なの？

ソラミ 普通だよ。ほんとに普通のお母さん。ね、それよりお友達、探してるんじゃないの？

ジョバンニ あ、そうだった。ありがとう、ソラミ。

ソラミ うん。見つかったら一緒においで。またゆっくり話そうよ。

ジョバンニ うん！

ソラミ お友達、見つかるといいね。

ジョバンニ ありがとう！

ジョバンニはソラミの車両から出てカムパネルラがいる車両に入る。座っている青年を見つけて声をかける。

ジョバンニ あの、

カムパネルラは返事をしない。ジョバンニはカムパネルラだと気づき、表

情が変わる。

ジヨバンニ カムパネルラ。

カムパネルラ ザネリもずいぶん走ったけど追いつかなかった。

ジヨバンニ (笑って) カムパネルラ。

カムパネルラ 久しぶり。

ジヨバンニ うん。

ジヨバンニはかつて二人で作った星図表を取り出し、

ジヨバンニ ねえ、あれからいろんな星を見つけたんだよ。(窓から外を指

しながら) あの赤く光ってるのがアンタレス。サソリの赤い目玉。それから

アルベルト、エドウィン、ジョルジュがソラミの車両を通り抜け、ジヨバンニたちの車両に入ってくる。ジョルジュは熱心に話し続ける。

ジョルジュ ですから、相対性理論に基づけば宇宙は確実に進化しているのです。宇宙は不安定であり、常に変化し続けている。もちろんそれは何億年という我々には観測できない単位ですが。宇宙には始まりがあり、

アルベルト ジョルジュさん。

ジョルジュ それは一つの原子から始まったと私は考えています。始まりの

原子は現在存在する元素の全てを含み

アルベルト ジョルジュ。

ジョルジュ その原子が爆発することによって宇宙は始まった。それ以前の宇宙には時間も、空間さえもなく、現在観測できる物理法則のいずれも存在するかどうかわからない

アルベルト (やや大きく) ジョルジュ。

ジョルジュ あ、はいなんでしょう？ (質問を期待して嬉しそう)

アルベルト 申し訳ないが、君の説は・・・馬鹿げている。

ジョルジュ いえ、でも

アルベルト (制して) 確かに、確かに相対性理論の計算上に不安定な宇宙が現れるのは理解できます。

ジョルジュ はい！ですから

アルベルト しかし、それはあくまでも「計算上」の話です。実際に見て取れる我々の宇宙は安定しているし、君の言うように膨張しているよう

には見えない。

ジョルジュ しかし

アルベルト 理論はあくまで理論でしかないのですよ。君の理論は正しい、計算上はね。しかし、現実の宇宙はどうもその理論に合致していないように私には思えるがね。

ジョルジュ そうでしょうか。それはまだ観測技術が追いついていないだけで、

エドウィン その言い方は心外だな。君は、われわれ観測者の腕が足りないから、自分の説が立証できないのだと、そう言いたいのかね。

ジョルジュ (慌てて) ああいや、そういう意図で言ったわけではありません。ただ、可能性の話として

エドウィン 可能性。そう、可能性は無数にある。しかし、事実の一つしかない。可能性を求めるのは多いにけっこう。それが君たち理論家の仕事だ。しかしね、事実が出そろわないうちから、可能性の話ばかりするのはナンセンスだと私は思うがね。

アルベルト それに、宇宙が膨張しているという説を聞くのは初めてではないのですよ。以前ロシアの、なんと言いましたかね？(エドウィンに)

エドウィン いや、私に聞かれても。

アルベルト 確か、フリードマン、そう、フリードマンだ。君の前にも、相對性理論を取り上げて、宇宙が膨張しているとそんなことを言ってくる人間はいたのですよ。

ジョルジュは覚悟を決める。

ジョルジュ 私はあなたの論文を隅から隅まで読みました。そこから導きだした答えが、膨張する宇宙です。私には、宇宙定数の存在を認めることはできません。(ややムキになって) あなたは、あの取ってつけたような数値に納得されているんですか。あんなの、それこそ計算のため可能性をひとつでっ上げたようなものじゃないですか！

エドウィンはジョルジュの失言に嘆息する。間。

アルベルト 確かに、宇宙定数は観測結果から想定される宇宙に合わせるための都合の良い道具に見えるかもしれませんが。私にとっても、あれは受け入れがたいものです。

ジョルジュ そうですか！

アルベルト　しかし、私にとっては膨張する宇宙の方が、宇宙定数よりも受け入れがたく思えるのです。ジョルジュ、君は天文学者であると共に神学者でもある。失礼ですが、宇宙に始まりがあるとすると君の考えは、どうも君個人の執着が見え隠れしているように思えますが。

間。

ジョルジュ　わかりました。失礼します。

ジョルジュは悔しさで動けなくなりそうな体を必死に動かし、車両を後にする。

ジョバンニとカムパネルラは3人の空気に気圧され、ジョルジュの行き先を見続ける。

アルベルト　（ジョバンニたちに）すまないね。驚かせてしまった。カムパネルラ　いえ。

アルベルトはジョバンニの持っている星図表に目を止める。

アルベルト　君たち、星は好きかね。

ジョバンニ　うん！

アルベルト　そうかそうか。おお、これはずいぶんとできがいい。見せてもらってもいいかね。

ジョバンニ　どうぞ。

アルベルト　ありがとう。

アルベルトとエドウインは星図表を眺める。

ジョルジュはソラミがいる車両に移る。明らかに落胆している。大きなため息をつく。ソラミはそちらに目を向ける。

ジョルジュ　（苦笑して）座っても？

ソラミ　どうぞ。

エドウイン　ほう、こんな暗い星まで・・・。

アルベルト　君たち、これは全て目で観察したのかい？

ジョバンニ　はい。

カムパネルラ　違うだろ。お前の父さんの望遠鏡。

ジョバンニ　あ、そうだった。望遠鏡も使って。

エドウィン なるほど。君たち、名前は？

ジョバンニ ジョバンニ！

カムパネルラ カムパネルラです。

エドウィン ジョバンニにカムパネルラ。将来はきっと立派な天文学者になれるかな。
（アルベルトに）

アルベルト そうですね。

ジョバンニ ほんとに？エドウィン・ハッブルみたいになれるかな？

アルベルト エドウィンですか……。 （エドウィンを見ながら）彼は確かに立派な観測者だとは思いますが。

エドウィン そうでしょう。

アルベルト 同じ有名な天文学者ならガリレオとか、コペルニクスとか……。コペルニクス。

アルベルトは固まる。

エドウィン あ。

ジョバンニ え？

カムパネルラ どうしたんですか？（エドウィンに）

エドウィン ああ、うーむ……。がんばって。

エドウィンはそう言い残して去る。

カムパネルラ え？

ジョバンニ ちよっと！

二人も追いかけて去る。

だんだんと音楽が高まってくる。

ジョルジュ どちらまで？

ソラミ わかりません。いけるところまで行こうと思っています。

ジョルジュ それはいい。この列車は、実際どこまでも行けるからね。

ソラミ 本当ですか？

ジョルジュ 本当だよ。あとで車掌さんに聞いてみるといい。

残響の中、電車の走行音が聞こえる。ゆっくりと舞台が明るくなる。電車の走行音が消えると、無音になる。

ジヨバンニとソラミが座席に座っている。ハルミは別車両に座っている。さらに別の車両にロバートが立っている。

ジヨバンニ どこまでいけるんだろうね。

ソラミ そんなの、わかんないよ。

ジヨバンニ どこまでも行けるよ。きつと。

車掌が現れる。

車掌 まもなくー、終点、宇宙の果てです。なお、この列車は回送列車となります。続けてご乗車はできませんので、ご了承ください。まもなくー、終点、宇宙の果て、宇宙の果てです。

ジヨバンニ え。

ソラミ 宇宙の果て？

ジヨバンニ この列車に終点があるの？ねえ！（車掌を呼び止める）

車掌 なんてしようか？

ジヨバンニ 宇宙の果てって。

車掌 ああ、終着駅ですよ。降りる支度をしてくださいね。

ソラミ え、なんで、だってこの列車は、この切符はどこまでも行ける切符なんでしょ？

車掌 そう、「望めば」どこへでも行ける切符だ。望まなければどこへも行けない。ただお話を追ってたどり着いた地点、そこが終着駅になる。

君たちはこの先に何を望むのかな。

ソラミ そんなの、わかんないよ。

ジヨバンニ ソラミ。

車掌 それならここが終点だ。さあ、降りる支度をしてください。

車掌は去る。

ジヨバンニ ソラミ、僕は進むよ。本当の幸いはきつと、どこかにある。これからどんなに見つけられなくなっても、最後の最後まで本当の幸いはあるんだって信じ続ける。だって、カムパネルラが信じてくれたんだから。

ソラミ いいな。ジヨバンニ君はちゃんと見つけられたんだ。本当の幸い。
ジヨバンニ え？

ソラミ だって、もう疑うことはないんでしょ？ジヨバンニ君にとって、
本当の幸いは、カムパ君だったんだよ。私にはわかんないよ。もう何
も考えたくない。もう何もしたくない。ただ、この列車に乗っていた
い。

ジヨバンニ それじゃ、ソラミの切符が灰になっちゃうよ。

ソラミ いつかは灰になるんでしょ？それならもうそれでいいよ。灰になる
まで、このまま繰り返し乗ってるだけで私はいい。

間。

ジヨバンニ ねえソラミ。僕と約束してくれないかな。

ソラミ ……。

ジヨバンニ ソラミと僕の住む世界は違うけど、僕と本当の幸いを探してく
れないかな。ほんとは僕も怖い。いつかカムパネルラのことを忘れて、
信じる事ができなくなって、列車を降りようとするかもしれない。

ソラミ そんなの、だめだよ。

ジヨバンニ ソラミと一緒に進んでいってくれば、僕もきつと進める。切符
が灰になる最後の最後まで、ちゃんと進める。ねえ、約束して。

ソラミ ジヨバンニ君、これはお話の世界だよ。お話の世界なら簡単に約束
できる。でも、この時間が終わって、お話が終わって、私は私の世界
に戻らなくちゃならない。ここでなら言いたい事は言えるよ？でもね、
この境界線の向こうじゃ、劇場を超えて、商店街を超えたところじゃ、
そんなこと簡単に言えないんだよ。

ジヨバンニ ソラミは、僕はここにいるんだって、声は届くって、カムパネ
ルラに言ってくれたよね。僕の声は、ソラミには届かないの？

車掌 まもなくー、終点、宇宙の果て、宇宙の果てです。

ジヨバンニ 僕は信じるよ。ソラミはそこにいて、僕の声はちゃんと届くつ
て。ソラミはソラミの世界で、ちゃんと進む事ができるんだって。僕
は、信じてるから。

ジヨバンニはソラミの前に椅子を一つ置き、去る。

ロバート 君はどうする。

ソラミ・・・。

ロバート 望まなければ、いつだってそこは終着駅にすることができ。動きを止めて、歩みを止めれば列車を降りるルートはどこにでもある。しかし君が出会って来た人々は、自分が立つ地点を終点だとは認めなかった。信じて、疑って、それでもなお信じようとして進んできた。

どうだろう。君の立つ宇宙の果ては、終着駅なんだろうか。

ソラミ そんなの、わかんないよ。

ハルミ そうだよね、わかんないよね。

ロバート ソラミ。

ソラミ なに？

ロバート 君のいる場所は、お話の世界とは違う、確かなものなどないところかもしれない。それでも、私は君に進んでほしい。道を選んで、その先をみてほしい。私たちはもう進む事はできないから。

ソラミ ずるいよ。そうやって人にばっかり進めって言って、自分は何もしてないじゃん。

ロバート そうかな。君がそう思い込んでいる人も、本当は進もうとあがいているのかもしれない。

ソラミ そんなの、わかんないよ。

ロバート そうだ。わからない。だから信じて、願うしかないんだよ。

車掌はソラミに乗客から集めた灰の切符を渡す。自身の切符を取り出し、ソラミに渡す。

ロバート メメント・モリ。どうぞ良い旅を。

ロバートはソラミから離れ、去って行く。一人取り残されるソラミ。静かに、うつすらと音楽が聞こえ始める。

車掌が現れ、ジョバンニが置いた椅子の先に道を作る。

車掌 次の停車駅は、銀河ステーション。銀河ステーション。

ソラミは一步を踏み出す。その先に役者たちが道を作って行く。その歩みと共に音楽は大きくなって行く。音楽と共により高く、高く上って行くソラミ。最上段にたどり着く。ハルミは道の手前に立つ。音楽が止む。残響。ハルミにもらったコンパスを見つめながら、

ソラミ お母さん。私行くね。

ゆつくりと溶暗。明かりが消えきる直前、ハルミが一步を踏み出すのが微かに見える。

三十二、ジョバンニ

ゆつくりと明かりが点く。ソラミが最上段で本を読んでいる。ジョバンニが星図表と夜空を見比べている。

ジョバンニ あのと赤く光っているのがアンタレス。サソリの赤い目玉。それからね、あっちの空に光っているのがアルビレオ。目で見ただけじゃ一つの星にしか見えないんだけど、本当は二つの星で、連星って言うんだ。ね、カムパネルラ

カムパネルラは答えない。

ソラミは本に乗客達の切符を挟み、歩き出す。他の役者達も出てくる。

ジョバンニも星図表をしまい、ソラミとは別の方向へ去る。

終わり。

※台本の全文は1部500円にて販売しております。

ご希望の方はクロ・クロ制作部までご連絡ください。

※上演をご検討される際は、必ずクロ・クロ制作部までご連絡ください。

クロ・クロ制作部 kurokuro.office@gmail.com